

# 発明文化論

〈第 67 回〉

丸山 亮

## 世界遺産

富士山が世界文化遺産に登録される見通しとなった。万葉の昔から歌に詠まれ、霊峰として信仰の対象となってきた山であれば、世界遺産に登録される資格は十分にあるのだろうが、登録することの意義はどこに求められるのか。

そもそも 1972 年のユネスコ総会で採択された「世界の文化遺産および自然遺産の保護に関する条約」に根拠がある。その目的には「文化遺産及び自然遺産を人類全体のための世界の遺産として損傷、破壊等の脅威から保護し、保存するための国際的な協力及び援助の体制を確立すること」が謳われている。各地が登録に熱を上げるのには、そうした建前はともかく、人を呼び込みたいという打算があることはいうまでもない。

日本は古来、山岳信仰が盛んで、富士山に限らず三輪山など、多くの山がその思いを引き受けてきた。さらに道教の神仙思想は、中国や周辺国の山岳信仰と結びついており、後年の日本への影響も無視できない。またヒマラヤは、ヒンズー的な世界観から、これも神聖視されている。世界的に見て、自然の豊かなところは自ずから自然崇拝の心を育んだ。日本の富士信仰も、そうした文脈でとらえる必要がある。世界文化遺産の登録を機会に、世界の他地域との並行関係を確認してみるのもいいだろう。ところで富士山が自然遺産でなく文化遺産で登録されることの背景はなにか。

富士には、近世の江戸以来盛んとなった富士講が文化遺産としてある。富士山を信仰する集団が講を作り、富士詣での登山、巡礼をしたり、家に祭壇を設けて祀ったりした。富士山を模した富士塚と呼ばれるものが各地に残されているのはその名残だ。

千葉県流山市にある富士塚を訪れたことがある。数メートルの高さに岩と土が盛り上げられ、庭の築山のようにも見える。寄進者の名前などを刻んだ石碑がいくつかその上に立っており、ミニチュアの富士といっている。容易ではない本物の富士登山のかわりに、富士講の集いなどではこの富士塚が拝まれた。都内にも富士塚は多く、そのいくつかは、重要有形民俗文化財に指定されている。

日本人の富士信仰は相当根深いものがあるようで、ブラジルの日系人社会は、やはり庭に富士塚のようなものを築いて、日本人のアイデンティティを保持しようとしているという。

オーストラリアのアボリジニーたちが崇拝しているエアーズロックと呼ばれる巨岩がある。1987 年、世界遺産に登録された。この呼び名は 1873 年にイギリスの探検家が巨岩を発見した後に命名したもので、アボリジニーたちはウルルと呼んでいる。彼らの聖地であり、儀式が行われる場所でもあるため、一般人の登山は快く思われていない。入山禁止の措置が取られようとしたこともあったが、当面は観光業界への配慮から見送られている。

中国雲南省の、これも世界遺産に指定された梅里雪山。チベット仏教の聖地とされ、古くから信者は山腹の寺院までは巡礼してきた。彼らも部外の登山隊を、神聖な山を汚すとして嫌っていた。そうした中、1991 年、日中の合同による学術登山隊が雪崩で遭難し、17 名が死亡する事故が起きた。遭難者を悼む慰霊碑が建てられたが、後に壊されるなど、地元の人たちがよそから来た登山者を見る目には、今日でも冷ややかなものがある。

日本三景、百名山のように名所を選別するアイデアは以前からあるものの、世界遺産という規模にまで拡大したのは、もちろん国連機関としてのユネスコあってのことで、登録制度は一つの発明といっている。けれどもこの登録制度には毒もある。梅里雪山の周辺には大きなホテルが林立し、景観破壊が起きているようだ。富士の世界遺産登録で毒氣に当たらなければいいが、気がかりである。

(まるやま りょう 共生国際特許事務弁理士)